「躓いたんでせう。多分。」

母　「それから、こうなんです……私は、急いで行つて、子供を抱き上げました。……バタッ……と彼が又轉びました。驚いて、私は、又抱き上げました。……バタッ……と地面に。斯ふして、七八度續けざまに倒れました。」

醫者　「それは不思議ですな……御病人を見る事が出來ますか？」

母　「どうぞ。」

（彼女は出て行つて、そして、腕にその子供を抱きながら再び現れる。子供は、非常に健康さうな色を頰に現してゐる。）

醫者　「これは見事だ。この子供は……どうぞ下に置いて下さい。」

（母親は從ふ。子供は轉ぶ。）

醫者　「もう一度どうぞ。」

（前記と同じ動作をする。……子供が轉ぶ。）

醫者　（考へ込む）「おかしいな——」

（彼の母親の腕に支へられてゐる病氣の子供に向つて。）

醫者　子供は、ヅボンを穿いて、ゆつくりした上着を着てゐる。）

「あのネ、坊や。どこか痛いところがあるかね？」

坊や　「いゝえ。」

醫者　「頭が痛い事はありませんか？」

坊や　「いゝえ。」

醫者　「昨夜よく睡りましたかね？」

坊や　「はい。」

醫者

「今朝お腹が隙いてゐますか？スープを喜んで食べますか？」

坊や　「はい。」

醫者　「やはりさうだ。」

（頷いて）

「これは麻痺症に罹つてゐる。」

母　「麻痺！……あゝ、どうしやう！」

（彼女は、手を上に擧げる。子供が轉ぶ。）

醫者　「嗚呼、さうです。奥さん。下肢の完全な麻痺症です。そして、又お子さ

んの肉が、全くの無感覺に罹つてゐる事も次第におわかりになるでせう。

（話しながら、彼は、近づいて、直ちに實驗に取り掛る。）

これは〳〵、いや……これは……

（吹き出し乍ら）

母　えー、何ーんだ。奥さん。あなたは麻痺だなんておつしやつて、何を馬鹿な事を云つてゐるのですか？。」

醫者　「けれ共、先生」

「立てないのも尤もですよ。……貴方は、お子さんの兩足を、彼の半ヅボンの同じ側に入れてゐるんですよ！』（Le petit malade.）

頓智ある人の復讐

アルフォン・カールは、才能ある作家であつたと同時に、庭園と草花の熱心な愛好者であつた。ニィースの附近に、隣人として、お金持ちの英國人を持つてゐた。其の英國人は、立派な圖書館を所有してゐた。

或日、アルフォン・カールは、彼の勉強に必要であつた本を、貸してくれる樣に、人を使はして、願はした。

「お氣の毒ですが、其れは出來ません。私は、規則として、本を、決して、外に貸出さない事にしております。併し、若し、カールさんが、私の宅で、お讀みなら、終日でも、喜んで、お許し致します。」

と、此の英國人は、答へた。

數日後、圖書館の事件は、すつかり忘れてしまつてゐた隣の人は、其の作家

に如露を貸してくれる樣に願はした。

「お氣の毒ですが、其れは出來ません。私は、規則として、私の庭から、如露を、貸出さない事にしております。若しも、あなたが、私の家で、散水なさるならば、終日でも、喜んで御許し致します。」

と、アルフォン・カールは、答へた。(Petite vengeance dun homme desprit.)

パストール

ルイ・パストールは、佛蘭西の大學者でありました。彼は、一八二二年に生れ、一八九五年に、七十三才で、死にました。彼は、絶へず化學を勉强し、そして、大發見を致しました。此の發見以來、他の醫者は、傳染病と云ふものをよりよく知り、それ等を止める事に成功したのであります。

一八八五年に、彼は、狂犬病を治す方法を發見しました。多數の國にパストール研究所と呼ばるゝところの病院がありますが、それ等の病院では、狂犬病に冒された人々を治すのであります。

パストールは死ぬまで、カトリック教を信奉しておりました。佛蘭西は勿論、外國でも、多數の人々が、彼の像を建てゝゐます。

パストールに就て、大變面白い話があります。

彼は、或晩、娘や婿や其の子供達と一緒にブウルゴオニュの別莊で食事をしておりました。櫻桃が食後に出てゐました。彼は澤山食べましたが、それを食べる前に、わざ〳〵コップの水に入れて、それから一つ〳〵丁寧に拭いてゐました。外の會食者達は、こうした極端な用心を、嘲笑してゐました。これを見たパストールは、櫻桃の皮に着いてゐる目に見えない微菌に對して、娘や孫達が無頓着な事を穩かに諭しました。それから、こういふ微生物が本當に居る事を實證しやうと、長々と熱心に說明をしてやりました。そして、最後に、果物

は、豫めこれを洗つてからでなければ決して食べてはいけないと云ふ事を皆んなによく云つて聞かせました。

それから、暫くして、彼は、何か深い冥想に耽つてゐましたが、櫻桃を洗つたコップを、機械的に攫んで、一息に、其の水と、それから……微菌までも呑んでしまいました。

(Pasteur)

好敵手

一六九八年に生れ、一七五〇年に死んだ佛蘭西の元師モリス・ド・サクスは、長身なのと、怪力で知られてゐた。

彼は、或日、巴里の附近の村にとまつて、彼の馬の蹄鐵を附ける事を其處の鍛冶屋に頼んだ。職人は蹄鐵を附けやうと、一つの蹄鐵をとつた。惡戯をしやうと思つた元師は、下のやうに云ひながら、鍛冶屋の手から、蹄鐵を、奪ひ取つた。

「一寸待つた。君― 此の蹄鐵は、良ろしくない。まあ御覽！」

さうして、彼は、蹄鐵を、容易く二つに折つた。彼は、同じやうに、二番目のも折り、次に三番目のも折つてしまつた。

職人の驚きを暫時樂しんだ後で、彼は、仕事の了へるのを其のまゝにしておいた。そして支拂として、一エクー（昔の貨幣）を差出した。

職人は笑ひながら、「おゝ！ おゝ！ この御金は、何の價値もない。まあ〳〵御覽なさい！」

そして、彼は、其のお金を、指の間で、折つてしまつた。外の御金も皆んな同じく折られてしまつた。

元師は、此度は、反對に、驚かされた。併し、此の様な競爭者を見付けて、非常に幸福であつた。彼は、それで、少しも憤慨しなかつた。反對に幾らかの

金貨を職人に與へた。

元師は、職人の側を去りながら、「二百フランの費用のかゝつた蹄鐵が此處にある。併し、私は、君に會つて、非常に嬉しい。」と云つた。

(A bon chat, bon rat.)

(註) 以上の笑話はいづれも舊稿であつて、佛蘭西の小話を譯したものである。

雜　咏　集

村上鬼城選

春

早春や底淺く澄む池の水

業卒へて故山の姿見る日かな

摘草にはなれ〳〵の姉妹かな

春の燈や別府土産の竹細工

寄居虫や岩の凹みの溜り汐

山櫻散り込む渓の深さかな

夏

五月雨や門を過ぎ行く傘直し

干草のむるゝ匂ひや日の盛り

出帆のドラが鳴るなり雲の峰

雲の峰翼を張りたるグライダー

紫に茄子つや〳〵し夏の露

露涼し籠の中なるちぎりもの

滴(したり)や巖苔生ふる崖の端(はな)

出征の留守を守りて田植かな

大藁屋深閑とあり田植留守

高々と吊つて新らしき蚊帳かな

噴水や或は高く又低く

虫干や有用の書無用の書

螢一つ蚊帳を離れて飛びにけり

老杉を洩るゝ陽筋や苔の花

蛇の尾の見え居る草のいきれかな

捨てゝある猫の死骸や草いきれ

月見草道より低き大藁屋

月見草ほとぼりさめぬ河原石

秋

秋の夜やそこともわかぬ茶立虫

新涼を無沙汰の手紙書きにけり

唐黍の穂に秋風を見る日かな

秋雨や竈(かまど)にいぶる青松葉

走馬燈に夜一時のまどひかな

乃木祭や長府の空を飛ぶ蜻蛉

渡り鳥一羽おくれて渡りけり

苫舟のかゝる入江や鳥渡る

鵯や食ひこぼしたる青木の實

鶺鴒や屋根飛び越えて中庭へ

鵙の來て靜まる軒の雀かな

目白來るや菊戴も交り來る

かな〳〵の終日鳴けり山の宿

蜩や梢に殘る夕日影

連山の晴れ極はまりし蜻蛉かな

芭蕉葉の窓一ぱいに戰ぎけり

背嚢に芒さしたる兵士かな

秋草や富士を映して澄める湖

故郷に似たる山河や秋の草

桔梗の蕾つぶらや萱の中

コスモスや水の上らぬポンプ井戸

末枯や日は照りながら雨の降る

草じらみなかなか取れぬ毛布かな

初茸や富士の裾野の小松原

山葡萄茨の中に見つけけり

冬

切干の乾く匂ひや冬日和

冬ざれや括り上げたる桑の枝

一九二

杣人の鋸の歯たつる寒さかな

初霜や日の當りたる密柑山

霙るゝや蓮田の水はかれはてゝ

凩やさけちぎれたる芭蕉の葉

凩の吹きへらしたる葎かな

冬山や谷うつりする鵯の聲

大瀧の水涸れはてゝ山眠る

大岩のうづくまりたる枯野かな

川涸や鶺鴒歩く岩の上

一九三

川涸れて鐵橋高くかゝりけり

フレームの油障子や冬構

鴛鴦(おし)や池に落ち込む松の雪

鴛鴦や羽つくろひして岩の上

千鳥啼いて雪となる夜や琴の浦

をちこちの岩に雪ある海鼠(なまこ)かな

外浦や舟かたむけて海鼠つき

連山の雪かゞやけり冬木立

菊の花の咲いて日和の定りぬ

枇杷(びは)咲いて春に似た日の二三日

枯柳や吹きとがりたる河原石

牡蠣船のともる障子や枯柳

以下「春光句集」へ

終りに

題目だけは澤山並べて見たが、一つとして物になつて居ない。

文章のまづいのはまだしも、内容の空虛に至つては、實際自分乍ら嫌氣がさす。

然し、考へて見れば、こゝ五六年といふものは、全くの靜養時代だつたのだから、さう面白い事や、すばらしい事件等あらう筈が無い。

其の上、參考書籍は、一切長府に置いて來たのだから、纏つた事が書け樣道理が無い。

口から出まかせの事を言つて、それをツルに筆記させて、出來上つたのが、此の原稿である。そして、校正から一切合切を來島と舛谷の兩君に一任した。

茲に改めて、之等の人の勞を謝するものである。

元來、人に廣く見せる爲めに書いたものでは無い。只自分の雜記帳として、書き止めて置いたものに過ぎ無い。

從つて、此の本を分配する人も恐らく十人を出まい。

そして、其人達が、讀まうと讀むまいと、一向かまはないのである。

こゝに來て滿二年と二ヶ月、その「思ひ出」として、此の書をなしたに過ぎないものである。

昭和十一年十一月

著書目錄

題名	發行年月日	摘要	頁數	備考
天華の夕	昭和四年四月十九日	生氣に關する講話	一一四	非賣品菊半版
生氣小品集	昭和四年九月廿二日	生氣に關する雜文集	一七二	非賣品四六版
思ひ出	昭和四年十月廿五日	隨感隨想集	三一〇	非賣品四六版
本邦炭山勞働事情一般	昭和四年十一月廿五日	論文	一四〇	非賣品菊版
空間船	昭和五年十月三十日	創作・飜譯集	二三一	非賣品四六版
はらから	昭和五年十二月卅一日	詩及隨筆集	三〇一	百合子多美子との共著非賣品四六版
驚異の世界	昭和六年七月二十日	科學小說短篇集	二五六	非賣品四六版

最近の飛行機と將來	昭和六年十二月五日	飛行機に關するもの	一六八	非賣品四六版
明日の飛行機	昭和八年二月三日	飛行機に關するもの	二五六	非賣品四六版
蠅取週間に就て	昭和十年十月	害虫驅除に關するもの	三〇	非賣品菊半版
老松庵放吟集	昭和十一年二月四日	俳句集	七四	非賣品菊半版
最新飛行機集	昭和十一年三月三十日	模型飛行機寫眞集	六三	非賣品四六版
火星其他	昭和十一年十一月三日	科學及經濟小論集	八〇	非賣品四六版

昭和十一年十二月五日印刷
昭和十一年十二月十五日發行

非賣品

山口縣豐浦郡長府町大字豐浦村二七九三番地
著者兼發行者　貝島慶太郎
東京市本所區石原町二丁目十四番地
印刷人　太田良一
東京市本所區石原町二丁目十四番地
印刷所　一幸舍印刷所

終